

第3話

# 兄さんの仕事

1

A Drop on the Palm 1



いつもと変わらない朝のはずだった。

普段通りにパンを焼き、サラダと目玉焼きを作って、昨日総菜屋で買っておいたシヤケの切り身を焼き、二人分の朝ご飯を用意する。

食べ始めたあと、一度キッチンを出て珈琲を淹れ、再びキッチンに戻ろうとしたところで、兄さんに声をかけられた。

「優吾、その服、同じのが何着もあるのか？」

「え、あの。そういうわけではないですよ？」

なんだろう？

「うん。ここに来てから、同じ服……いや、二種類の服しか見ていないなと思ってな」

しまった。服装には無頓着むとんちゃくだと思っていた兄さんに、気づかれた。

ここは素直に言うべきかな……。

「そうですね、あまり服にはお金かけてないので、数も持っていないくつて。まあ、着れればいいかなって……」

「金がない、か？」

ごまかそうとしたけれど、ずばり言い当てられてしまった。

「はい……」

兄さんは僕の返事を聞くと、こちらをちらつと見てから視線を落とし、フォークをテーブルに置いた。

「生活費としては足りなかったかな？」

兄さんからは、生活費としてある程度のお金は貰っている。

「いや、あの……」

無駄遣いをするなど親によく怒られていたせいで、細かく報告することはしにくいんだけど、言うしかないのかな……と悩んでいると、

「まあ、その年じゃ、友達付き合いの金もそれほどないだろうし、服も買えないか……」

あははは。

軽く笑って済ませ、キッチンへと移動する。珈琲の用意が途中だったので、「豆を挽き、湯を沸かす。珈琲を淹れ、テールブルへと持って行くと、兄さんからまた話しかけられた。

「今日の大学は何時に終わる？」

「今日は必修の科目が休みなので、図書館でも行こうかと思ってました」

うちの大学の図書館か、少し歩いて隣の国立大学の図書館あたりを考えていた。

「ということは休みか？」

「はら」

「じゃあ、たまには仕事を見るか？」

突然そんなことを言われたので、少し驚いてしまった。

「誰の？」

いや、兄さんの仕事に決まってる。

「……あ、兄さんですよね」

「授業参観ならぬ、職場参観ってのをしてもいいだろう。何をやって稼いでいるか、くらは知っていてもいい」

「じゃあ、お願いします」

そう答えると、少し笑ってから、

「とはいえ、今日は少し稼がないといけないから、いつもとは少しだけ違うんだけどな」

そういうと食事のテーブルから席を立ち、自分の椅子へと戻って行った。

どうしたらいいのかな……と思いつつ、とりあえず食事の後片づけをしてしまう。そうすると、後ろから、

「終わったら、椅子を持ってこっち来な」

という兄さんの声。ちょうど終わったところだったので、椅子をコロコロと押して兄さんの隣に行くと、

「へー、これがよく聞くJohandの弟さんか。で、何？ 血は繋がってるの？ どうなの？」  
と、モニターから聞いたことのない声が聞える。

「えっと、どなた様で？」

「面食らってそう聞くと、」

「そっか、何も言ってなかったのか。僕はまあ、Johandをリスペクトしている者ですよ」

「リスペクト？」

僕たちの日常会話では、あまり使わない言葉だ。

「ああ、ごめん。尊敬、って言った方がいいのか。うん。尊敬でわかる？」

「はい、わかります」

「じゃあ改めて、Johandを尊敬している三浦雄太ゆうたと言います。Johandとの関係は、そうだな。君主と武将みたいな？ なんつって」

三浦さんはけらけらと笑いながら、微妙なたとえを使ってくる。

「はあ」

「で、僕のさっきの質問だけど、血は繋がってるの？」

「いえ、血は繋がってません。小さい頃に一緒に育った……というか、僕が兄さんに育てもらったような感じですよ。一時期一緒に住んでたので」

「ああ。それで、今も住んでる、と」

「は？」

「Johand、彼はなんて呼ばるの？」

Johandと云うのは彼が、兄さんを呼ぶ時の名前らしい。なんでそんな名前なんだろう？

「そうだな、ゆうご、とでも呼んでやれば良い」

兄さんがそれに答えた。

そう呼ばれるのは問題ないし、兄さんの友人から名前を呼ばれるのはなんか嬉しい。

「うん、わかった。じゃあゆうご、初めまして。これからもよろしくです」

「あ、どうも、申し遅れました。菊宮優吾です。糺ノ杜大学の一回生です」

「へー、近いところだね。あの辺はいっぱい大学があるけど、どうしてそこなの？」

「文学部があったのと、近所だったので」

なんかがんがん来る人だなあ、と思っていると、兄さんが助け船を出してくれた。

「三浦、もう九時になるぞ。準備してくれ」

「おっと、はいは？」

三浦さんの顔が急に真面目になった。へらへらしているのは、こういう他愛のない会話の時だけみたいだ。

「で、Johand。本日の目標はおいくらですかね。ちょっと注目の銘柄が何個かありますよ」

「そうだな、今日は少し勝負をかける。なので目標としては五〇〇六〇くらいと思ってい



る」

「おっと、結構いい数字だね。弾たまとしてはいつも通りで？」

弾？ 弾ってなんだろう？

「そうだな。いつも通りでいいだろう。追加がなくても今日はいけると思う」

なんだかそのまま会話が進みそうなので、遮って質問してみる。

「あの、弾ってなんですか？ 銃でも撃つんですか？」

「ぶはははははははは」

モニターの中の三浦さんに、盛大に笑われる。だって、知らないし……。

「ゆうごくくん、ここで言う弾ってのは拳銃やら大砲やらの撃ち合いじゃあないんだ。まあ、

やってることは似てるけれど、第一僕らには撃つための道具がないし、持っているのは違う

道具なんだ」

「違う道具？」

「うん、そこにあるPC、パソコンだね。それを使って撃ち合う。弾は現金、というより

数字かな。それを使うためには現金がいるけどね」

三浦さんの説明は少し抽象的で、よくわからなかった。

「……ということは、携帯ゲームの石みたいな感じですか？」

我ながらたとえが酷いな……と思ったものの、お金——現金ではなくて、お金のように使



えるもの——といったら、友人たちがよく遊んでいる携帯ゲームの石に近いのかと思ったのだ。

「石? ……ああ、なるほど。石か。携帯ゲームね」

そう言って三浦さんは再び笑った。恥ずかしくもなり、少し怒り感じたけれど、三浦さんはすぐに「ごめんごめん」と謝った。

「なるほど、いや、そのたとえは正しい。ちょっとその発想はなかったもので、つい笑ってしまった。ごめんね、ゆうごくくん」

「いえ」

「で、続きだ。ゲームの石、というたとえは結構当たっている。金、現金を株という価値のある別のものに替えて、勝負をする。JohandはScalpingスキャルピングがメインだから、普段はあまり弾を使わないんだ。だから、いつもと変わるのかと思って聞いたんだよ」

「三浦、今日は結構饒舌だな」

「まあ、Johandお気に入りのゆうごくくんなら、話すき。で、指定銘柄は何にする?」

「そうだな……」

いつもの正面のモニターだけではなく、周囲に配置された、衛星のようなモニターにも、グラフが現れた。おびただしい数のグラフと数字が並んでいる。

「ちょっとだけ時間を貰えるか? 少し比較したいので」

そう言うてから、ちらっとこちらを見て、

「三浦、ちょっと優吾の相手してやってくれないか。すぐ済む」

「了解、ゆうごくくん、改めまして、こんにちは。僕にとって Johnd、君のお兄さんは会社の重要顧客の一人であり、個人的に尊敬している人でもあるんだ。で、その彼が大事に思っているゆうごくくんの場合は、初対面であろうと大事にしたいと思っていますよ」

モニターの中の三浦さんは笑顔だけど、眼鏡の奥の眼はあんまり笑っていなくて、ちょっと恐い……。

「会社って？」

おずおずとそう聞くと、

「うん、証券会社の支社長なんてのをやってるんだ。まあ、実は親父が上で、世襲せしゅう的な感じなんだ。だから、僕がえらいってわけじゃないから気にしないで」

いや、充分えらいと思うんですが。

「で、ゆうごくくんのごとが凄く気になるので、いろいろ教えてくれると嬉しいんだけど、オーケー？」

「あ、はい。えっと、名前……はさっき言いましたね。大学も。あとは……」  
いったい、何を言えいいんだろう。

「じゃあ、こうしよう。僕が聞くから、ゆうごくくんは答えて」

「お願いします」

「では、ゆうごくくんってかっこいいけど、イケメンとか学校で呼ばれる？ モテる？」

——いや、突然何を。

「いえ、モテませんし、イケメンじゃありませんし……」

「ふうん、ジャニにでもいそうな感じなんだけどな。わかった、じゃあ次。年齢は？」

「二〇になります。もうすぐ二一です」

「えーっと、あれ？ さっき一回生って言ってなかった？」

「浪人、しまして」

ちよつと言いくらいなことだけど、隠しても仕方がない。

「ロウニン……？ ああ、浪人か。なるほど、理解。あの大学、結構難しいものね。でもなんだって浪人してあそこに？ 授業受けたい先生でもいた？」

「家が近かったので、それで」

「ゆうごくくんは大学まで家の近さで選んだのか、なるほど、じゃあ、就職も地元希望？」

「そのつもりです」

これはまだ、親にも言ってないんだけど。

「そっかー、あの辺りって職、少なそうだから大変だけど、がんばって……って、 johand はまだっほいね」

兄さんの様子を見ると、やはりまだかかりそうだった。

「じゃあ、質問の続き。その服装には、何か意味やこだわりが？」

さつき兄さんから言われたのと同じような質問だ、

「数着しか持ってないんです。そう言ったら、兄さんが仕事を見せてくれるって話になりまして……」

そう言い訳めいた答えを返すと、三浦さんはなにかに気づいたような顔をした。

「あー、ごめんごめん。コレ、服つてのが『キー』だったんだっけ。申し訳ない。ごめんね」

「い、いえ」

いったい、どうしたんだらう？

「じゃ、もう一個。これは答えにくいかな。Johandってどういう人だと思う？ 何の仕事をしてると思った？ 彼のことだから、説明って少なかったでしょう？」

どういう人？ 昔から知ってる兄さんは、優しくて面倒見が良くて、でも言葉は少なくて、頼りになる。そんな人だ。最近の兄さんは、どうだらう……。

「答えにくい？」

「いや、そんなんじゃないです。えっと、そうですね。兄さんは、昔から知っている兄さんです。離れて暮らした知らない時間もありましたが、でも優しくて大好きな兄さんです」

「そっか。Johandのことを大好きって言ってくれるのは嬉しいね」

「おす」

そこで、脇から兄さんのツッコミが入った。

「まあまあ。で、仕事はどういうことをしてると思っただ？」

「えっと、よくわからないですけど、家で何かやってるんだらうなとは……」

正直に言っ、「何を」しているのかはあまり気にしていなかった……というのが本音だ。朝必ず早く起きるし、夜は早めに寝ているので、きつと昼間に何かやっているとは思っていたし、土日は僕自身がよく外出しているけど、まあ休みなんだらうな、という程度で。

「おい、三浦。それを今から見せよう、って話だから」

「ああ、了解。で、どこまで説明する？ 今日の流れだと、僕がサポートを強くするって必要はないんだろ？」

「そうだな、とりあえず優吾はわからないことだらけだろうから、気にしといてくれ」

「はいはい、じゃあサポートしますよ。ゆうごくくん、なんでも聞いてね」

「ありがとうございます」

そうこう言っている間に、兄さんの準備は整ったようだ。

「よし、建設系で行く。三浦、データリストくれないか」

「とか言っ、どうせ持つてるんでしょ？ ……まあ、こつちのも送りますよ」

モニターの画面がどんどん動き出した。

「なんか、すごいですね……」

誰に言うでもなくつぶやくと、

「ああ、マーケットが動き出したからね。株のマーケットは九時から一五時までで、昼休みがあるから、一日五時間だけ動いてるんだよ。その時間はがん値段が動くからね。今どうなってるか、僕からはわからないけど」

うちのモニターの状況は、カメラの位置の問題で三浦さんからはわからない。

「えーっと、モニターが沢山あって、そのモニターの大半でグラフと数字が動いています」

兄さんの環境は、いろんな人の話を聞くとかなり特殊らしい。いろんな人と言っても、学内の友人くらいにしか聞いていないので、定かではないけれども。

とにかく、パソコン一台に、普通モニターは一つだけだ。なのに、ここには合計八つある。その前には大きい長テーブルがあり、そこにキーボードが一つとボールのようなもの（トラックボール、というらしい）があった。トラックパッド、なら友人のノートパソコンで見たことがあるのだが、トラックボールは他では見たことがなかった。

普段点いているモニターは、正面の大きいモニターとその上のモニターくらい。でも、今は全部のモニターが表示されており、脇のモニター四つで、数字と線グラフが少しずつ動いている。

「データは表示されてるんだな？ いつも通り、タイミング来たらで頼む」

「ん」

生返事のような兄さん。

「利益多めに期待するってことは、差額中心になりそうだし、成り行きじゃなくて指し値でいいんだよね？」

「だな、指し値と数はこっちで見るので、注文処理だけやってくれ」

「了解」

またわからない言葉が出てきた……。

「さて」

と、兄さんの一言を合図に、モニターの文字やグラフに重なって、文字列だらけのウィンドウが表示される。意味のあるような文字列が、どんどん流れて行く。

「これは？」

「SNSで情報が出ていないか探している。何かしらあると思うんでな」

画面をよく見ると、「建築」や「工事」などの文字がハイライトされている。

「違うな……」

兄さんが小さく言葉を発するごとに指が動き、ハイライトされている単語が変化する。

—— 地方、契約、通行止め、幹線道路。

「この辺か……」

画面には「高速道路」の文字が並び始める。

スクロールが目で追える速度になると、文章が読めるようになってきた。目を凝らして細かな文字を読むと、どうやら来週から、どこかの高速道路で大規模な工事がある、期間中は迂回うわいが必要になったり、下道が混むことなどが読み取れた。

「引つかかるのはこの辺かな、三浦。高速の工事に関わってる業者、すぐ調べられるか？  
一〇件、いや、五件でいい。一部はあまりなさそうだから、二部でもいい」

「あいよ。まあ、でかい規模の工事だから、どこの会社かはすぐわかると思うよ」

そう言うともニターの中の三浦さんは、別の方向へと視線をやって、何かを見ながら高速で指を動かし始めた。

無言の室内に響くのは、打鍵音と、パソコンなど電子機器のファンと独特な電子ノイズ。  
「おっと、キーの音がうるさいから、ちょーっと音切るね」

キーの音は聞えなくなる。

モニターの中の三浦さんは、誰か他の人と話したりしているみたいだ。他にも人がいるのか。いや、証券会社なのだから当然か。

そんなことを考えていると、モニターの音声が復帰した。

「調べたよ。大体六社。まだあまり値動きのない二部が四社。元請けであろう一部のところが二社。そんなところだ」



「データ送って」

兄さんの返事はシンプルだった。

「もう送ったよ。確認して」

「届いた。ふうん」

そう言いつつ、キーボードを叩く。それと同時に脇のモニターの表示が変化する。

「ちよっと弱いな、他のところも欲しい」

「了解、じゃあどの辺？」

「そうだな」

ハイライトされている文字がまた変化する。

——新築工事、ビル、修繕。

「このあたりに引つかかる、修繕を含めて総合的にやっているとところがあるよな」

そう言うと三浦さんを拝むようにして、

「頼む、教えてくれ」

「おいおいおい、やめてよ。そんなのすぐ出るよ……」

画面の三浦さんは、本当に困ったような表情をしていた。

「はい。データ送ったから」

「ありがたい。ちよっとすぐに出てこなくてな。……ああ、ここか。ここなら、子会社と

か孫請<sup>まごう</sup>けで必ず頼むところがあるよな。多分、ことここじゃないか？」

「どうやら、画面では見えないところで、テキストのやりとりをしているらしい。」

「んー。そうだな。この辺つてのは公的に情報出てるけど、ことここもかな」

「ほう。ここもか」

そう指示代名詞で会話されていてよくわからないのだけど、画面の数字とデータの表示されているものは会社名と数字、グラフがどんどんと変わって行っている。

すぐく数字がばたばたと動いていて綺麗だな、ってそんなことを思っていると。

「じゃあ、そこを中心にいくか」

「そこ？」

「今、優吾がぼーっと眺めていた中央組っていう総合建築会社だな。一部上場企業で、今日は五三〇から五四〇でふらついている」

「そうだね、あまり最近顕著なものはないね。先週少しだけ上がって、今は落ち着いてる」と三浦さん。

「まあ、中央組を直接たとまずいから、そことの取引のあるところの話盛るって方向で、今日はやっていく」

「ちよっとリスキーだね」

三浦さんが笑いながら言った。

「いや、いつもよりは安全だ」

いつもより、つてどういう意味だろう？

「まあ、少し遊びますか」

「そっちに送っておいた四社の株を、八〇万から一〇〇万くらいで、買える分だけ買っとして。余り一〇〇にするくらいで良さ」

「これは成り行きでいいの？」

「すぐに買いたないので、その辺は任せる」

「了解。直接でも構わない？」

「問題なし」

会話を聞きつつ画面を見てみると、今度は会社名っぽい文字列にハイライトがかかっている。

「会社名を出して話することも多いんですね」

「SNSってのは結構なんでもあってね。面白いことに『誰に見られているかわからない』のに、ぼろぼろと内部情報を書いている人もいるんだよ」

とは三浦さん。

「え？ だって、そんなことしたらまずくないですか？」

驚いていると、脇から兄さんが、

「目の前が画面だと、仕事中だと思っちゃうんだろ。ネットだと人格が変わる人も多いぞ」

「ネカマとかね」

三浦さんが笑う。

「ネカマ？」

「ネットオカマ。男なのに、ネット上では女のふりをする事だな」

「へー」

「まあ、それはいい。で、こうやって出た話をまとめていく」

画面の表示は会社名を中心に絞り込まれていく。

「今は単に抽出してるだけだからまだ上っ面だな。情報とまでは言えない。しかもこれはつぶやきに過ぎない。じゃあどうするか。まとめれば情報になる」

画面の一角に別のウインドウが開いて、ウェブ画面が表示される。

「やらなくてもこの会社のはすでにあっただか」

打鍵音が辺りに響く。この、居間兼兄さんの仕事場にはBGMらしいものは一切ない。会話がなければ、キーの音やファンの音、人が歩いている音くらいしかないのだ。

普段は僕が喋っていたり動き回っているのであまり気にならないけれど、こうやってモニターを見てじっとしていると、キーを叩く音の存在感が際立っている。

「じゃあ、貼っとくので、ちょっと目に付くところで、他に広めさせといて」

「あいよ、いつも通り会社以外の連中にやらせるわ」

「いつも通りって？」

「情報の精査ってただだよ。たいしたことじゃない」

兄さんはそう言ったけど、三浦さんは、

「正直、ばれたら罪になるかも知れないね。風説の流布、って言われる可能姓はゼロじゃないからね。でも、こういうのは正直『ひっかかるのが悪い』っていう低レベルなことなんだけど。が、オススメはしないので、ゆうごくくんはやらないほうがいいよ」

そう言って笑いながら、

「さて、貼り付けはしたよ」

貼り付け？

「ああ、要するに、さっきJolandからもらった『情報』を、目立つところにペースト、貼り付けしたってことだね」

先回りして解説してくれる三浦さん。

「じゃあ、他へも少し広め始めるので、そっちでも動きあったら連絡を」

「あいよ」

リスペクトって言ってた割には、三浦さんって兄さんに対して「あいよ」って返事するんだ。あれ、でも……。

「三浦さん」

「何？」

なぜ、今ごろ気がついたんだろう。

「そういえば、兄さんのこと、なんで johand って呼んでるんです？」

「あれ？ 説明してなかった？」

首をかしげて、さも不思議そうな顔をしている。

「聞いてませんよ」

「うん、最初に会った時の名前なんだよ」

「最初に？ 最初について、普通に手代木じゃないんですか？」

会った時の名前って？

「ああ、あだ名みたいなものだよ。彼はその時 johand って名乗って僕に会った。そして、

その時のまま今に至るので、僕は今でも johand って呼んでるってわけ」

「最初の呼び名ってことですね」

「そういうこと」

「まあ、最初っから本名だと何かと面倒だからな」

兄さんが会話に入ってくる。

「手代木、なんて珍しい苗字、速攻で足がつくからあまり使いたくないんだよ」

「変わった苗字だと、そういうこともあるよな」

「まあな。お、ちよつとずつだが動き出したな。餌に食らいついたかな」

餌っていうのは、さつき「貼り付け」たものなんだろう。

「それにしては早くない？　ちよつと別件もあるのかもね」

「その辺のマーケット情報の収集はおまえの領分だろ。調べつつ値動きを確認してくれ。

他の銘柄も見て、タイミングが来たら始める」

「今日は金額が金額だから、元手からの信用？」

「そうだな。残りの一〇〇での信用。どこまで行ける？」

「どっちをメインで見るか、だよな。本丸？　先兵？」

「今、値動きが始まった方が先兵ってことにしようか。優吾、グラフと数値がどんどん右肩上がりになってるのがわかるか？」

兄さんに言われて視線を画面に戻す。さつきからしばらく、画面の方を見ていなかった。改めて画面を見ると、先ほどから一〇分も経っていないのに、明らかに数字は足されているし、緑の色も派手になっている。そしてグラフも右の方に向かって上がっている。

「右の方が上がってるだろ、これを右肩上がりって言う」

「それは知ってます」

「そうか。で、勢い、つまり角度だな。それが今、かなり上がって来てる。これを先兵と

言っていたわけだ」

なぜ先兵なんだろう？

「見ていればわかるが、あと数分もしないうちにこのグラフはすたと落ちる」

そこで兄さんは、三浦さんに向き直って、

「ここ信用金額分全部空売りで。一〇時二二分定時で。買い戻しのタイミングはまた指示」  
「普通時間指定なんかしないぞ」

そう言って、笑いながらも何か作業をする三浦さん。こちら側からはよく見えない。

キーの音とマウスを動かしてクリックしているような音がする。

「あいよ、で、かなり厚い壁っぽいよ」

「まあぶち抜くさ」

会話をしつつも、兄さんの手は止まらない。他のデータをどんどんとめくるように見て調べている。今までデータが流れていたモニター上に、SNSのウィンドウを移動させていく。ハイライトの文字がさっきまでとは替わり、「値上がり」という単語になる。

画面はまた、勢い良くスクロールし始める。文字の洪水に酔いそうになって、思わず視線を外し、下を向く。

「優吾、慣れてない者には、ずっとモニターを見続けるのは難しいだろう。ちようどいい、ちよっとお茶を頼む。あまり熱くなくていい」



「わかりました」

正直、ありがたいタイミングだった。

湯沸かして湯を沸かす時に、肩が硬くなっているを感じたので、伸びをする。

「確かに、ああいう画面を見続けるのはちょっと難しいな」

と、人心地つきつつ独り言を言う。

そうこうしているうちにお湯が沸いた。日本茶が飲みたい気分だったので、宇治で買ったお徳用の袋から缶に移してあった茶葉を使って淹れる。

「ありがとう」

お盆を持って戻ると、兄さんは画面を見ながらも気がついてくれたようだった。

お茶をテーブルに置いて、兄さんのそばから少し下ろうとすると、

「うん。疑心暗鬼的な噂が回ってきたね。優吾、ちょっと左の上のモニターを見てみな」

モニター上でのSNSの発言速度が明らかに上がって行く。

「なんだか、会社の名前が増えている感じがしますね」

すると、画面の中の三浦さんがかわりに答える。

「そりゃ、ね。一気に三万株ほどの『買い』が入ったんだ。何かある、って思うもんだよ。で、下がるような話がない。面白いもので、上がる話がないのに、上がった時はみんな尻馬に乗ってチキンレースをやりだすんだよ。で、そうなるたびわじわと価格が上がっ

ていく。普通はそうなると、海外勢みたいな大金持ちがごそつと下げる。で、Johandはそのタイミングを見る。だよな？」

「まあな。もう少し上がるが、そろそろ昼だ。午後からは一気に元値に戻るだろうから、この辺が際だが、もう少し」

そろそろ昼。という言葉で時計を見る。

「一一時一分か」

兄さんも時間を確認していた。

「三浦、じゃあ、一一時二〇分買い戻し、全部で」

「え、いいの？ まだまだ上がってるよ。言われりゃそうするけど」

「手数料は引いとけよ」

「確定？」

「それで」

「じゃあ、確定で。なんか今日は落ちない感じだけだなあ」

三浦さんが「落ちない感じ」と言うのはわかる。一時間ほど前の、上がり方が凄かった頃に比べれば全然だけど、まだまだグラフは上がっていた。

そのまま全員でグラフを眺めつつ、一一時一五分になる。突然、見ていたグラフと数字の画面が赤くなる。

「え、どういう動き？」

「赤」

「来たな」

僕と三浦さんの驚きとは裏腹に、兄さんは待っていたものが来た、という風だ。

三二〇だった数字が、三一七、三一五、三二二と見る見るうちに下がっていく。グラフには、坂を転げ落ちるような傾斜がついている。

「崖ってほどじゃないけど、まだまだ落ちるから」

兄さんの言葉通り、緑の数字を表示していたグラフは、赤のまま、矢印が下を向いたまま、どんどんと更新されていく。

「おおお。あいつかわらさずげーな。これだからJohandは楽し」

笑いながら、銘柄を見ている三浦さん。

僕はといえば、先ほどまでの「落ちない感じ」というのが一瞬で変わったのがまだ信じられない。

「なんで？」

さっきまで、あんなに上がっていたのに。

「そろそろ二〇分だ。丁度で買い戻し、全部いってくれよ」

「いや、売りばかりだから楽にいけるよ」

そして一一時二〇分、買い戻し完了。

計算してみると、朝の価格に比べて九%ほど下がっていた。なので、一番高かった一〇時二五分くらいの金額に比べると、一八%ほど変動したことになる。

「思ったよりも上がったか。これで今日は確定で終了しようか。午後のマーケットはなしで」

「久々に見せてもらったよ。これ、手数料を引いても七、八〇は利益出てるわ。信用でここまで行くって、やっぱりjohandは違うね」

しきりにモニターの向こうで感心している。

「現金には何時にできる？」

「ああ、ちよつと待ってくれ。処理するから」

そう言うと三浦さんは、またマイクをオフにして、奥に消えて行った。

「あんな貼り付けをした投稿だけで、あんなことにはなりませんよね？」

つい、そんなことを聞いてしまう。

あまりにも、これまで持っていた株の世界のイメージとかけ離れていた。まるで、兄さんの思う通りに値段が変わっていったようだった。

「そうだな。あそこだけじゃなかった。日本だけじゃなくて、USの株主用の場所に『こんなものがあるよ』とか、EUにもネットの情報が集中する場所があるから、そこにも書いた」

「それは、日本語で？」

「そう」

「だと、向こうの人には読めない」

「そう、読めない。でも、それでいいんだよ。会社名と株コードだけわかればいい。後は勝手に想像してくれる」

「勝手に？」

「勝手に想像して、勝手に期待して、買って、売る」

「なんとなく流れで買っちゃう、つてのはわかるんです。並んでたらつい並んじゃう、みたいな心理ですよ」

前に健也が言っていた、「なんか並んでるラーメン屋って並んじゃうよな」っていう心理と同じだろうか。

「そうだな」

「でも、なんで勝手に売るんですか？」

「何もなかったから」

「え？」

「何もなきや、買いはしてもすぐ売らんだよ。株屋って」

「でも、買ってすぐ売ったら利益とか」

「出るよ、利益」

と、思った事を先に言われてしまう。

「買ってすぐは値段が上がる。そして売ったら微妙ながら利益は出る。手数料を考えたらとんとんかも知れないが、大損にはならない」

「はあ」

「で、あとはタイミングなんだよ。売るタイミング」

「そこもわからなかったんです。なんであのタイミングで皆が皆売りになったんです？」

そう、一気に流れが、潮目が変わるようにサーッと引いていった。それこそ、天井まで来たから降りるといったように。

「それも簡単。何でもないことだよ。それを知らせる為に、翻訳したものを貼って『なんにもないよ、騙されるな』って教えてあげた。海外の人たちに」

「えっ」

それだけ？

「それだけ……なんでですか？」

「それだけ。まあ、もう少し説明すると、人は見たいものしか見ないし、単純な事ほど信じやすい。これは、株をやってる人間であっても、まったく変わらないんだよ」

「悪い、遅くなった」

少し時間が経ってから、三浦さんが画面の前に戻って来た。

「振り込み処理も済ませたから、いつもの口座に入ってるはずだ。例によって手数料と手  
伝い代は引いた」と

「了解」

兄さんが画面上で操作しているのは、ネットバンキングのサービスらしい。画面が小さ  
くて、よく見えないけど。

「優吾、じゃあ、昼飯と一緒に服とノートパソコンでも買いに、大阪でも行くか」

「大阪？」

「京都駅前の大型電器店でもいいが、そっちにするか？」

「あ、どっちでも」

「わかった。何が喰いたい。それで決めよう」

そう言われて、今何が食べたいかと考えたら、ふっとソースの味を思い出した。

なので、ちょっと考えてから、

「お好み焼き。どっちかっていうと京都の」

「京都のか、だとすると四条だな」

そう言うってから、兄さんはモニター上の三浦さんに声をかけた。

「ということ、午後は店じまいして外出するわ。今日使ったSNSでの発言も消しといった方がいいぞ」

「ああ、それはさっきすでに消しましたよ。恐いからね、立場上いろいろと」

そう言えば、三浦さんって証券会社の支社長とか言っていたっけ。

「悪いな、危ない橋を渡らせて」

「ま、Johandの頼みは受けますよ。マイロード、ですからね」

「じゃあ、また明日な。振り込み確認した。回線切るぞ」

「了解。ではまた明日ね、Johand」

三浦さんが手を振っているまま画面が固まって、そのまま電源が落ちた。

「三浦と、こうやって会話しつつ、株の売買をやってる……というのが仕事、かな」

「仕事って、偉い人から指示を受けてやるものかと思ってました」

父さんなんか、そんな感じなので。

「まあ、大半はそうだけだな。この場合は生きる為の金銭があればいいので、こんな感じだ」

\* \* \*

京都駅に着くと、兄さんはATMにお金をおろしに行った。



大きい電気屋さん前で兄さんを待ちながら、道行くスーツの人たちをぼんやりと見る。

こういう生き方もあれば、兄さんのような生き方もあるのか……。

そんなことを考えていると、兄さんが戻ってきた。

「ほら、持っておけ。この金で、服とパソコンと今日の飯だからな」

と言って、押し付けるようにしてお札の束を手渡される。

「えっ、こんなに」

けれど、すでに目の前に兄さんはおらず、

「おい、何してる。まずはパソコンを買うぞ」

と、どンドン先に行ってしまう。現金をそのままにするわけにはいかないので鞆の中に入れ、鞆をお腹の前に抱え、そのまま急いで兄さんの後を追う。

やっと追いついたと思ったら、

「じゃあ、適当に決めて買いな。こっちはそのまま四条の方に出て、飯屋を探しておくから。後で決まったらメールする」

そういうと踵きびすを返してさっさと、外へと出て行った。

ちよっと気にはなるけど、買ってこいと言ってもらえたので、そのまま四階へと移動する。パソコンのフロアに着いたけど、どれを買えばいいのかわからない。

結局、店員さんを捕まえ、相談して購入した。

その後、四条への道すがらの服屋を何軒かはしごして、上下それぞれ三着ほど服を買う。渡された札束は、それでもあまり減っているように見えない。最後に服を買った店で計算したところ、どうやら七〇万円ほど渡されていたらしい。

いろいろ買っても、三〇万円ちょっと残った。これは返そう。

服を買っている最中、兄さんからお店を知らせるメールが届いたので、指定されたお店に向かう。そのお店は、河原町かわらまちから四条しじょうどお通りを烏丸に向けて歩いた途中にある、お好み焼き屋さんだった。

店に入って名前を言うと、すぐに席に通された。

「買えたか？」

兄さんの表情からは、機嫌が良さそうながうかがえた。

「はい。買えました。で、お金がかなり余ったんですが……」

そう言って返そうとすると、

「取っておけ、また服とかが必要な時にでも使いな」

「え、でも」

「たまには、保護者っぽいことさせろよ」

そう言って、兄さんは楽しそうに笑った。

次回〈試し読み第四回〉更新日は**9月8日**です。

[『手のひらの露』作品ページはこちら](#)